

196 99mTc-pyridoxylidene isoleucine (PI)の臨床利用

愛媛大 放

○石根正博, 棚田修二, 河村 正 石川演美  
中田 茂, 上田幸介, 飯尾 篤  
高橋正治, 浜本 研,

各種肝, 胆道疾患者を対象にPIを投与して経時的にイメージングを行い, 肝, 心臓部での放射エネルギーの変動および血中放射エネルギーの測定により, PIの有用性の臨床的検討を行った。

各種肝, 胆道疾患患者107例にPI 5mCiを静注投与して, 投与1分後より, 1分間隔で10分まで連続, 及び15, 20, 25, 30, 45, 60分の計16枚のイメージをマイクロドットイメージで得た。さらに胆のうが描出されたものでは, セオスニン1 µgを筋注して15-30分後の収縮状態を観察した。投与5, 10, 30分後に採血して, 血中濃度をpercent doseで得た。関心領域を心, 肝, 胆のう部に設定して, 夫々の放射エネルギーの変化を記録してcompartment analysisを行った。

肝への摂取は10分で最高に達し, 以後速やかに胆のう, 腸管に移行した。正常例では5-10分後に最高で, 閉塞性黄疸で遅延が認められたほかは, 正常例と有意差は認めなかった。5分後血中濃度の各疾患群間の差は有意でなく, これはPIが腎から比較的早期に多量に排泄され, 殊に肝障害群ではその程度が大となるためと考えられた。

PIは血中濃度測定および肝への摂取, 排泄速度の測定によって肝機能検査に用いるには不適當であると考えられる。シンチグラフィ剤としては代謝が速かで短時間内に検査が実施し得て, 胆道, 胆のうの描出も明瞭でDIC法で描出し得ない病変が描出されることもあり, すぐれていると考えられた。胆のう機能の定量化も可能である。

197 99mTc-HIDA スキャンからみた

胆嚢描出の臨床的評価

北大 放

○伊藤和夫, 古館正徳, 入江五朗  
砂川市立 内  
南須原浩一  
札幌市立 放  
小柴隆蔵

99mTc-HIDAの臨床的有用性に関しては, 次第にその価値が認識されつつある。従来の<sup>131</sup>I-BSPあるいは<sup>131</sup>I-Rose Bengalと比較して, 充分その代用をなし得る放射性薬剤と考えられる。

今回は, 約150例の99mTc-HIDAスキャン施行例中, 確定診断のなされた症例について胆嚢描出という点に関して検討を加えたので報告する。

胆嚢描出の病的意味を判断する為には前処置として, 検査前の絶食を守らせることが必要である。胆嚢描出例に対しては, 静注後45分ないし60分で脂肪食あるいは胆嚢収縮剤(セオスニン)を投与し, 胆嚢収縮状態を観察した。胆嚢不描出例のノ部に対しても同様の処置を行なった。

胆嚢描出の状態を分類すると, 1) normal filling 2) delayed filling 3) Non-visualization 4) passive filling following reflex 5) superimposed filling 6) othersの約6型に分類された。胆嚢疾患, 胆管系の閉塞機転の存在する症例では, 胆嚢描出がみられないか, あるいはpassive fillingを示す症例がみられた。更にcholedocal cyst例では胆嚢像を判定する事が困難な症例が多かった。

99mTc-HIDAの胆管系への移行がすみやかである点から, 胆嚢描出という点に関して胆道系疾患について検討した。胆嚢描出という問題は, 少なくとも外科的黄疸例の鑑別に関して, 99mTc-HIDAスキャンの重要な所見と考えられた。